アメリカ人の広島旅行体験記

Americans in Hiroshima

June 15, 2016

Original text by Airman 1st Class Elizabeth Baker
374th Airlift Wing Public Affairs

その場所で起きた出来事に対する見聞を深めるため、広島平和記念公園と原爆ドームは、私がこれまでずっと訪れたいと思っていた場所だ。しかしながら、第二次世界大戦中の戦火に生き、今なお暮らしている日本の人々ことを思うと、この国で自由に旅ができることに、普段とは違った思いが生まれる。

広島平和都市記念碑（原爆死没者慰霊碑）から「平和の灯」と「原爆ドーム」を望む

このほど、私は親しい友人と彼の母親と広島へ旅に出た。新幹線に6時間ほど乗って到着した広島駅は、東京で行き交う人々の光景と何ら変わりはなかった。私が日本で馴染んできたように、誰もが公共の場で静かにし、礼儀正しくしていた。

まず私たちは、アメリカが第二次世界大戦末期に広島市に投下した原子爆弾によって破壊された建造物「原爆ドーム」を訪れた。そそり立つ原爆ドームそのものが過去を物語っていた。核兵器による惨状をそのままの形で今に伝える世界で唯一のその建造物は、緑に包まれた広場、原爆死没者慰霊碑、広島平和記念資料館がある広島平和記念公園の中にたたずむ。また、いたる所に沢山の千羽鶴が平和への祈りのシンボルとして捧げられていた。資料館内では、目にするのが辛くなるようなさまざまな証言映像や体験記が公開されている。当時の様子が言葉だけでなく、学徒が身に着けていた制服の残骸、熱線で全身が焼けただれた被爆者の写真、壊滅した建物に残されていた焼け溶けた鉄など、実物の遺品や写真による原爆の実相が展示されている。

アメリカからの訪問者の一人として、慰霊碑や資料館を見てどう感じるか自問せずにはいられない。また、気持ちの中で“日本の人々は私たちのことをどう思うのだろうか”という思いがつきまとう。

原爆投下の時、自宅の前で遊んでいた3歳の男の子の三輪車（広島平和記念資料館展示）

原爆ドームの場所から移動しようとした時、3匹の猫を後ろに連れて歩いている一人の年配の男性が目に留まった。写真家として、その猫と男性は格好の被写体だった。彼が階段に腰掛け、猫たちにミルクをやり始めた時、私は少しばかり頭を下げ「スミマセン」と日本語で声を掛けた。その男性に写真を撮ってもよいか尋ねたのだが、彼は応えなかった。彼に気づいてもらおうと何度か試みたが、言葉の壁があって反応がないのではないのだと分かった。彼の本心は誰も分からないが、彼の反応は驚くまでのことでもなかった。彼と猫のもとを離れて、散策を続けた。

後に、友人と私は広島駅で3人のアメリカ人の交換留学生と会った。彼らは平和記念資料館での出来事を語った。資料館を出てきた一人のヨーロッパ出身の女性が、そのアメリカ人留学生に向かって声を荒げ、展示を見てどう思うかと問うた。その交換留学生たちは、その日私が他の人たちからも聞かされた同じ心情を伝えたという。それは、この戦争の時代に私達はまだ生まれておらず、何もするすべもなかったということ。

日本人の友人もアメリカ人の友人も、私が話をする全ての人が、戦争で受けた双方の痛みは、今日も誰も変えることができないと感じているようだった。私達にできることは、過去の戦争の犠牲に思いをはせ、それを再び繰り返さないようにすることだ。

問いに応じなかった年配の男性や、怒りを顕わにした外国人女性がいた一方で、日本の子供たちの態度は違った。慰霊碑のところですれ違いざまに何人かの生徒たちが元気よく英語で「ハロー！（こんにちは）」と声を掛けてきた。私たちが「コンニチハ！」と日本語で言葉を返すと、子供たちは喜んだ。また、歩くうちに何人かの日本の人々と言葉を交わす機会を得た。駐車場の管理をしてい

る地元の人は、日本特有の車庫を見せてあげようと私達に声を掛け、そのハイテクなシステムを見せてくれた。多くの人が、オバマ米大統領の平和記念公園への訪問について口にしていた。

友人である横田基地第730航空機動中隊ジェット推進技師ジョー・ガロウェイは、自分と共通点がある人とは誰とでも友達になろうとした。彼がどこに行ってもそうするように、かっこいい車を見つけては持ち主と話はじめた。フミヨという名前の年配の男性は、声を掛けられると喜んだ様子で彼の車日産180SXのボンネットを開け、ジョーを運転席に招いた。翌日もまた同じように、1949年製の日産スカイラインであろう車の持ち主と会った。

原爆ドームを前に、言葉の壁を越えて疎通を図る日米の2人
互いに興味がある車の話についても話が弾んだ

日本の人々の間では“人は3つの顔を持っている”と言われているという。世間で見せる顔、友人たちに見せる顔、そして誰にも見せない自分の心を映した顔。

私たちが出会って話した時に見せたフレンドリーな顔のどこが他の顔を隠しているといえるだろうか。おそらくその言われ通りであり、その通りでないかもしれない。経験からして、人との壁をなくす唯一の方法は、相手に友情を示したり関心を持つことだ。片言だけでも遠く離れた2つの国の人間は、互いに関心のあることについて心を通わせることができる。過去に起きた出来事の心の痛みは取り除くことはできないであろうが、私達は友情を育て、未来に責任を抱いていくことで前進することが可能だと信じている。